ジョナサン カナダ出身の元キリスト教徒

:

明:彼が祈りを捧げたとき、いかに神がこたえてくれたか。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 男性

より: ジョナサン

日29 Jun 2015

集日 29 Jun 2015

私はムスリムであることを光 に感じています。

そう感じるのには多くの理由があります。私が住む社会の中には、ムスリムであることとは相反する数々の基 があります。私が最初にこの生き方を始めたとき、どこまでそれに忠 であれるか分かりませんでした。ムスリムになることとは、基本的には明白な少数派に属することであり、それは通常、人が んでするようなことではないからです。しかし　なイスラ ムの教えについて学んだ 、私はイスラ ムを真理として受け入れなければならないと感じたのです。

私の短い人生の大きな部分をムスリムとして ごした今、神がクルア ンの中で っている「 」について知ることができました。どのようにしてアッラ が私の目を き、 を光で照らしたかを えています。私の人生の初期には、 定的な きというものがありませんでし

た。

造という概念の最も初 的な 面にさえ私はうろたえました。私は神が大自然の中に示す奇 に して 着でした。理科の授 で蒸 について学んだときのことを えています。私はそれを理解できませんでした。何が理解できなかったかというと、その 程ではなく、それが起きる根本的な原因についてです。

水循 と生命におけるその重要性は理解できたのですが、何が水を蒸 させ、それを再び空に すのかが私にとっては不可解でした。

神を知らずしてそうした疑 に突き当たったとき、私の思考は答えを つけ出すことのできない障壁にぶちあたってしまいました。私はただ に肩をすくめ、そうした考えを の片隅に追いやるしかありませんでした。

人 の身体の大部分が水から 成されているということや、または大宇宙の果てについて考えを巡らせていると、そうした 造の原因についてまったく理解できないでいました。

科学者たちは方法 については 明するものの、「なぜか」ということについては して触れません。つまり、彼らは 造の力学の では目的について 明するものの、力学そのものの目的については して 明できないのです。何が力学を 生させたのか、そして自然界に法が引き起こされた原因とは何なのでしょうか?

践的でないキリスト教徒の家庭で育った私は、キリスト教についての一般知 程度は持ちあわせていました。なぜ私がそこに きを求めなかったのかという理由は、それが一度も理にかなったものには えなかったからです。子供の に「神」と言う言 を くと、どこかにいるはずの、 的かつ唯一で全能の存在を思い浮かべていました。

私が抱いていたキリスト教に する はその教 で、さらに言えば神についての信条でした。つまり、それは本 的には3つの なる位格が同一となり1つの神の役割を果たす「三位一体」の です。それが三位一体 の公式な教 として主 されているのではないことは知っ

ていますし、バイブル　に 心なキリスト教徒は私が教 を理解できていないと　するでしょうが、私自身には　的にそうとしか映らないのです。

三位一体の教 に内在する　の他にも、私はキリスト教徒たちがイエスを崇 する事 を直 し、こう言ったものです。「もし彼らがイエスを崇 するなら、神はどうなるのですか?」なぜならイエスはバイブルの中で、天にいる神の方が彼よりも 大であると述べているからです。

その当 、私は正式にキリスト教を拒否しました。私はキリスト教徒／ 神 者／不可知 者となりました。私は身の回り、そして自分自身と 和した人生を送りたいと思い始めました。究 の目的について　着だった私は、それが 足感を得ることができるものというのを条件に、破 的な行 を取るようになりました。

私はほとんど自分の身体を 遣わなくなりました。他人に しても同 です。私はありがちな　逃避をするようになり、麻 とアルコ ルに手を出し始めました。始めはそれを社交の道具として用いたものの、やがては 静 として常用するようになりました。もしも かが、私に落ち着くよう言ったとしたら、私はその人物に し「何か理由があれば落ち着くが、その理由は何もない」と反 したものでした。そしてそうした人生を数年　け、さらなる深みにはまり、 々な麻 に手を染め、一 は密 にも携わるようになったほどでした。

しかし、やがて私は自分が何らかの慰めを求めていることに が付きました。私は きの光を たことがなく、迷い去って暗 の中におり、それらの区 が付きませんでした。私は物事の全体像を意 し出すようになりました。

私は死について考えるようになりました。虚 という概念について考えてみましたが、それまでの人生の中でも何度もそうなったように、人生の目的について考えてみると私の は空白になるだけでした。そしてある夜、ベッドに横たわり熟考していた私は空を仰いで言いました。「神よ、もしあなたが本当に存在するのなら、私をお助け下さい。」

その夜は、そのことについてそれ以上はもう特に意 することなく眠りにつきました。その 、不可解な9 11事件が 生しました。私はなぜそれが起きたのか、 には何が起きたのか、そしてどうして首 者を直ちに特定することができたのかなど、その状 全体に して困惑していました。そのとき、それまでに耳にしたことはあったものの、全く 知であった外来 、つまりイスラ ムに して始めて意味が与えられました。

私はイスラ ムが文字通り、中 のどこかにある 国だと思い んでいました。そしてそれはくべきことに、未だに多くの人々の にはびこっている大きな 解でもあるのです。ムスリムの宗教について知ってはいたものの、それは奇怪な 礼を持つ 教などのような宗教だと思っていました。しかしある夜、友人たちと出かけた にイスラ ムが い となりました。

友人たちの何人かがイスラ ムは愚かな宗教だと批判し始めました。 くべきことに、友人の何人かがムスリムで、彼らは自分たちの宗教を し始めました。そうしたトピックや、それが持つ近い将来への影 に 味を持った私はイスラ ムについて べてみることにしました。そして したことに きました。ムスリムたちは神を崇 しているというのです。さらに、彼らはイエスが 言者かつ神の使徒で、彼はムスリム（神に 依する者を指す ）であると信じ、神によって十字架に磔にされることから救われ、彼が神の位格の一部ではなく、神のみが崇 されるべきだと主 していることを知りました。

私は幼少の から神を唯一の 的存在として信じており、キリスト教を拒否したのもイエスへの崇 がきっかけであることから、それらの情 に共感を えました。

私はイスラ ムとキリスト教の比 を始めました。私は宗教 について 味を持つようになり、 えずその分野の をするようになりました。私はキリスト教の については祖母に相 し、イスラ ムについては友人たちに相 しました。そして双方に を してもらい、どちら のが に耐え得るものなのか かめてみました。

クルア ンとバイブルを通 し、自然界における神の奇 を 察し、 い自己省察のプロセスをて、私は自分にこう いかけました。「イスラ ムは真理として映るものの、それは本物

なのか? 」そしてその瞬 、私が以前に捧げた祈りが　をよぎりました。「神よ、あなたが本当に存在するのなら、私をお助け下さい。」私の全身に 肌が立ちました。これがその祈りに する答えだと直感したのですが、依然としてムスリムになるかどうか 躇しました。私が人 的 民族的にムスリムとして められるのかどうかが未知だったからです。

私は　を け、自分の 断を 押ししてくれるようなものを探していました。そしてある日、バイブルを んでいたところ、マタイの福音 26章39 に突き当たりました。それは次の章句です。

??????????????????????????????
??

私にとってこの章句は、私がイスラ ムにおけるイエス から学んだことの3つを　しました。つまり、彼が地面に を付けて祈ったムスリムであったこと。そして彼は死の杯を取り除かれることを祈ったため、死を望んではいなかったこと。そして彼自身、神に助けを乞い求めていたことから、彼が神ではなかったことです。

それが、私がイスラ ム改宗を 断する 定的要素となりました。ただし、使徒を受け入れないことにはその教えを受け入れることもできませんでした。それゆえ、2001年の12月28日、アッラ のご慈悲により信仰 言?(?????????????????????????????????????と言うこと）をし、イスラ ム改宗をしました。それ以来、私は多くの物事を 成し、 々な土地へ赴き、不可能とも思える程のことをやってきました。

信仰により、その甘美さも味わうことができるようになりますが、アッラ が私にもっと多くの善行をさせ、残りの人生もかれの道に生かせてくれるよう祈ります。あらゆる称 はアッラ へのものです。そしてかれの使徒ムハンマドに平和と祝福あれ。ア ミ ン。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/jp/articles/2485

著作　2006-2015 断　を禁じます。　2006 - 2023　IslamReligion.com. 断　を禁じます。